

故野村准教授*の思い出

大 崎 正 瑠

野村さんが突然天国に旅立ってしまいました。どなたでも人が亡くなると悲しいですが、自分より年下が亡くなると特に心が痛みます。2007年夏の胆石除去手術に関連があるのかどうか分かりませんが、2008年夏から体調をくずし、同年10月の精密検査の結果を知らされた時は、本人はもとより我々同僚にとっても衝撃であり晴天の霹靂でした。内容は膵臓ガンということでした。旅立ったのは、それから約半年後2009年3月31日突然のことでした。(以下親しみを込めて敢えて「野村さん」と書きます。)

私が、野村さんと生前最後に会ったのは、入院先の病院で2009年2月上旬でした。その後メールでも何回か交信しました。3月上旬にも病院にお見舞いに行こうと思い、携帯電話でその旨話したところ近々自宅療養のための退院準備で忙しいとのことで諦めました。自宅療養というのをもしかして回復途上にあるのかしらと思ったりもしました。携帯電話で最後に話したのが旅立つ2週間ほど前、そしてそれを知らず旅立つ日に彼宛にメールを送信しました。当然彼は私の最後のメッセージを見ていないでしょう。後から聞いた話ですが、彼が覚悟を決めた時以来「天の下の出来事にはすべて定められた時がある」と、むしろ周囲を説得するように旅立ちの準備をしていたそうです。

さて野村さんは東京経済大学卒業後ロスアンジェルスでの準備期間を含め約5年間「コミュニケーション学」の発祥の地として知られるアメリカ中西部の大学の一つウィスコンシン大学と同大学院で「スピーチ・コミュニケーション」を学ばれました。野村さんが帰国前後に入会した二人の共通の学会・日本コミュニケーション学会でも英語スピーチの名手で先駆者の一人として知られていました。

振り返ってみますと、私が野村さんと最初にお会いしたのは確か1989年頃だったと思います。お互いに専門は違っていましたが、共に日本コミュニケーション学会会員として全国大会で研究発表をしたり、同じ分科会で他の先生の発表を聞いて議論に加わったりしました。野村さんは、その頃はまだ新潟ビジネス専門学校に勤務されており、その後敬和学園大学専任講師・助教授となり、ともかく新潟で活躍していました。さらに同学会におられた野村さんの恩師で当時東京経済大学教授(現名誉教授)の徳座晃子先生とのご縁で1994年から東京経済大学非常勤講師、さらに1997年には同助教授として迎えられました。

1996年6月から1999年5月まで3年間、日本コミュニケーション学会において、私が評

故野村准教授の思い出

議員会議長、野村さんが同副議長という立場で一緒に仕事をしたことがあります。彼から受ける印象は、とにかく真面目で、かつ責任感が強いということです。その後私も縁あって前任校の大妻女子大学から東京経済大学に移り同僚となる訳ですが、東経大ではこれに加えて状況判断の正確さ、適格な発言と行動には学ぶべきことが多かったと思います。

東経大では2006年から3学部において英語の新しいカリキュラムが導入されましたが、1年生の必修科目に「英語eラーニングI」「英語コミュニケーションI」「英語プレゼンテーションI」があります。そのうち「英語プレゼンテーションI」は野村さんの提案によりできたものですが、この科目が選択科目でなく必修科目であるのは全国大学では東経大が唯一だそうです。彼がもっと長生きしていれば、彼の「スピーチ・コミュニケーション」の理論と実践が学内でも広く浸透するところでしたが、彼の志も半ばで終わった感があり、残念でなりません。

なお野村さんからは、彼がクリスチャンであること、奥様がキリスト教会のオルガニストであることは聞いておりましたが、それ以上のことは知りませんでした。このことについて周囲にはほとんど語っていなかったと思います。2009年4月3・4日の新潟市新津教会での前夜式・葬儀に出席して分かったことですが、彼は洗礼も受けた非常に敬虔なクリスチャンであり、日本キリスト教団新津教会の幹部役員として心身ともに教会を支えてきたということです。その時初めて彼の言動・価値観・世界観は、多分にキリスト教精神に基づくものだと知るに至りました。彼は単に教師でクリスチャンであるのではなく敬虔な牧師が大学でも教えていたのではないかとさえ思いました。そのような事情を知らず、いつしか冗談めいて「野村さんは真面目すぎるよ。野村さんの場合、ちょい悪くらいが丁度いいんじゃないか。」と彼に言ったことがありましたが、今思い返してみると失礼なことを言ったのではないかと赤面の至りで反省しております。

勤務先がお互いに異なっている時には時折新宿辺りで一献傾けながら議論をすることもありました。そして1996年の晩夏でしたか、私が佐渡に旅行に行った時、その途中で新潟市内を案内してくれました。夕方には車で日本海の傍まで連れていってくれました。波が打ち寄せては砕ける誰もいない海岸、かすみがかった西の空には焰のように真っ赤に燃える太陽が傾いていました。この名状し難い目に焼き付くような光景は今でもよく覚えております。この海岸は拉致被害者が何人か連れ去られた海岸でもあるとの説明を受けました。この時人間の運命について語った彼の語り口を思い出します。

終わりに葬儀の時に、野村さんが英語教師になるにあたり「英語を学ぶ意義」と題する文章を教会報に載せたものの一部が紹介されました。私も感銘を受けたのでこれを引用したいと思います。

「……たとえ短期間にせよ、外国を訪問したり、滞在することになると、言葉をはじめ様々な困難が伴う。それはすでに身に付いている風俗習慣、社会通念、思考形態、価値観等

を含む母国文化と外国文化との間の摩擦からくるカルチャーショックを体験することでもある。そのような異質の文化に触れることは、人の体験を豊かにし、視野を広める。冷静な目で自国文化と異文化とを比べ、日本と自分自身を相対的に眺める機会をもつことは、自己のアイデンティティを模索することでもある。その思考行動は自分の幅を広げ、自己の向上を促し、自信の源にも結びつき、ひいては他人を思いやる人間内にも繋がるものだとは私は思っている。(中略) 若者たちが今日の国際語である英語を学ぶ意義の一つはここに結び付くのだと私は思っている。(中略) 外国語を知ることとはそれだけ自由な人間になることができるのだということを私たちは忘れてはならない。(中略)」(新津キリスト教会熊江秀一牧師紹介による)。

今野村さんを生前に知り得なかった部分も含めて彼の人間としての全体像を眺めるとき、彼は人間としては私などよりはずっと上にある人と思います。教会の中では「こんな良い人が何故? 良い人は早く亡くなる。」という声が聞こえてきました。本当にそう思います。また自分自身のことを考え直すよい機会でもありました。

心よりご冥福を祈ります。

*2009年4月1日から教授昇進が決まっていたので、もう1日長生きしていれば教授となっていたところです。